

---

# バカとテストと中二病っ！

笠井吹雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと中二病っ！

### 【Nコード】

N1726BA

### 【作者名】

笠井吹雪

### 【あらすじ】

「お前ら脇役は下がってろ！俺が主人公として全ての敵を引き付けてやる！！」（この作品は主人公が厨二病能力を持っている訳ではありません。ただ単に性格がちよっと逝っているだけで召喚獣が激強ではありません。それにストーリー崩壊もしないはずなので安心して可愛いそんなバカをご覧下さい。あと男子に必ず一回起きる急性の方なのであえて厨二ではなく中二にしています。この作品は主人公視点です。）中二病の真っ盛り中学生『村上 航』は『東 航』としてある日突然バカテスの世界に転生した。そして彼は

Fクラスの皆さんと力を合わせて（？）戦争をAクラスを倒すことになる。『無限の想像力（中二病）』と『死角なき平均（一般学力）』を頼りに戦うあまり強くない主人公のお話。 まさかの1000  
PV突破

## 主人公設定

あずまわたる

東航 旧名 村上航

性格 急性の中二病。仲間のピンチになったり主人公の宿命を背負わされたら覚醒する。

容姿 黒髪ボサボサで目の色は黒（だいたい〇ングダムハーツのヴァニタス君みたいな髪型）。見た目は少し暗そう。女装すれば黒髪のツンデレ少女みたいになる。身長は中くらい（明久よりほんのちよつとだけ大きい）

特技 借りたゲームを一晩でクリアすること

好きなもの 唐揚げ、主人公の優越、自己満足、美少女、ライトノベル、チート能力、好手敵

嫌いなもの 雑魚、味のない脇役、セコい悪役、鉄人、負けること  
明久に対しては二股をやめると呼び掛けているが、当の明久は言葉の意味がわからない。ムツツリー二商会の常連で、いつも秀吉の写真を購入しては部屋に飾る。

テストの点数

ほとんど200点均一。ただ、家庭科や保険などは苦手だからおよそ150点。

召喚獣

武器 二本の刀

容姿 白いコートに長袖の黒いズボン。さらにおでこにはゴーグル付き（最初だけ）。

腕輪 当本人400を超えてないので不明

強さ 1.5から2倍の点数なら操作技術の差で互角に戦える。航いわく「少し反応が遅いリアルタイムシューティングゲームだと思えば余裕」とのこと。

戦い方 主に刀を一本だけ使う抜刀攻撃を主とする、カウンター作戦。味方（明久、須川など）をオトリに使い、敵の隙を突くことも。

多人数を相手にする場合は二刀流になり、無双をする。  
家族構成 転生者なのでいない

## 主人公設定（後書き）

たまに更新はします

## 朝の時間 俺と転生と神様

むらかみわたる  
村上航は死んだ。車にひかれて――

航が目を開けるとそこには――一人の威厳がありそうな老人がいた。

「今からそなたは転生することになった。」

「え…っ!？」

「じゃ、バカテスの世界に行ってもらうぞい。」

「話が全く掴めん。第一、ここはどこだ？お前誰？なぜ転生？」

大成は困惑していた。なぜならいきなり車にひかれ、さらに転生の話を持ちかけられたのだから。

「一気に質問するんじゃない。まず一つ。そなたは死んだのじゃ。

だからここ、天国にいるんじゃない。」

「車にひかれて俺は死んだのか…。」

「そして2つ。ワシは転生を司る神じゃ。」

「paperじゃなくてgodの方か？」

「…………。」

「おい！そこはきちんと答えようぜ!!」

「だってワシ…転生神に昇格してからまだ一ヶ月しか経ってないもん…。しかもまだかりんとうを食べてないもん。」

「かりんとうと転生神の関係どこだあああああ!!」

「まあまあ。落ち着け。かりんとうでも…」

「いらんわ!!」

老人は顔を真剣そうな顔に戻した。航は考えた。これはチート能力をもらえるチャンスだと。航は転生ものを二次元創作で見てたからわかるのだ。

「話は戻すがバカテスとは何だか知っているかのう？」

「名前だけ知っているが」

「わかった。ワシが説明しよう。バカテスの世界とは学園ものじゃ。それ以上はわからん。」

「説明になってないっ!」

「そんなとこじゃ。じゃあ行つてらしゃーい!」

「待て!チート能力はないのか!?」

「ワシは未熟だからあげられない」

「断言しやがった!」

「あ、あとFクラスに行つてね!。そのあとはカバンの中を見て色々頑張つてね!。バーイ!」

「まだ聞きたいこと…」

彼は一瞬にして消えた。

こうして一人の少年が波乱を及ぼす『クリエイター中二病』だとは誰も知らない。  
彼の凡庸さと想像力を持つてすれば最強も倒される…はず…

朝の時間 俺と転生と神様（後書き）

書いてみた…。

更新は亀以上に遅いからそこら辺よろしく…。では次に会いましよう！

一限目 第二問 僕と転校生とFクラス（前書き）

「一応設定ですから」by航

## 一限目 第一問 僕と転校生とFクラス

【サイド航】

俺は周りを見渡した。

今、立っているこの場所は校門のようらしい。

「ここがバカとテストと召喚獣の世界ってか…。」

転生神から聞いたバカテストって有名なラノベ『バカとテストと召喚獣』ということか。名前は聞いたことがある。いかにも学園モノっていう雰囲気だ。

新入生を迎える桜の花びらが舞い散る中、俺は真っ直ぐ進んだ。

生徒玄関前に腕を組んでいる強そうな先生がいる。その人は誰かを待っているかのように見えた。おそらく俺だろうな。だって文月学園への転校生だから。っていつの間に色々な知識などが頭の中に入っているが気にしない。

「遅いぞ、転校生。新しい学校だからといってたるんでいると補習するぞ」

彼は西村先生。転校する前に受けた振り分け試験（設定です。）の時、一際目立っていた先生だ。あだ名は鉄人と呼ばれている。ターミネーターの方が似合ってんじゃないの

「すみません、先生。でも主人公っていつも遅刻するようなもんじやないですか？先生はもしかしてテレビを見てる子供達に嫌われる立場の人になりたいんですか！？」

「それよりお前のクラスの通知だ」

スルーしたよな、血が熱いくせによ。まあそんなことはいい。とりあえず封筒を開けてみると、そこには最低ランクのFの文字が…

「振り分け試験の時に寝て当然の結果だ」

一応設定ですから。

そんな鉄人を後にして俺は階段を登った

【明久視点】

「すみません、ちょっと遅れました」

「早く座れ、このウジ虫野郎。」

せつかくの僕の中の新しいクラスの雰囲気台無しだっ！

「聞こえないのか？ああ？」

「…雄二、何やってんの？」

そこにいたのは僕の昔の悪友、坂本雄二だ。

「教師が遅れてるらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？なんで？」

「一応俺はこのクラスの代表だからな」

「それじゃあ、雄二がこのクラスのトップの成績なの？」

「ああ、そうだ」

ドヤ顔をする雄二。

ふんぞり返って床に座っているクラスメイトたちを見下ろしている雄二。

なんでこうなっているかって？みんな床に座っているからだ。

とりあえず空いているスペースでも探そう。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に覇気のない声が聞こえてきた。そこには冴えない風体のオジサンがいた。

「それと席についてもらえますか？ホームルーム始めますので」

「はい、わかりました」「うーす」

雄二と僕は返事をしてそこの席に座る

「えー、おはようございます。二年F組の福原慎です。よろしくお願いします」

先生は黒板に名前を書こうとしてやめた。うわ、チョークすらまともにも用意されてないよ。

「では、今日から新しく入ってきた、東航君です。」

転校生？どういう子なんだろう？まさか美少女！？僕の期待が高まる。

「どうぞ、入ってきて下さい」

入ってきたのはボサボサの黒髪の男の子だった。

「どうも、脇役の皆様。俺の名前は村k…東航だ！好きな必殺技は『クロスシザー』、好きなモビルスーツはグフフライトタイプだ！よろしく！」

『『『『『誰が脇役だ！』『』『』『』』』』』

まさか転校生がこんな酷いとはね…。ガツカリだ

【航視点】（少し前）

神が言っていたな、カバンを見ろって。階段の途中でカバンの中身を見てみると、

マップ

2-Fと書いてある紙が入っている茶封筒

筆記用具

参考書

財布

コリン星の触角

町のマップ

自分の好きなライトノベル

ってなんじゃこりゃ！！

なんで〇うこりんが付けそうな奴があるねんっ！？

そんなものはさりげなくカバンの中に戻し（必要になるかもしれないから）茶封筒に2-Fとか書かれていたから、おそらく旧校舎側の文化部の向かい側なのだろう。（いつの間にか頭にインプットされている）

（数分経過）

そこにはいかにも弱そうなオジサンがいた。そのオジサンは何かを探しているように見えた。恐らく彼は教師なのだろう。いかにもやられ教師役っぽい。オジサンを見ているとオジサンはこちらに近づいて来た。

「あなたが東航君ですか？」

名字が違うが……。恐らく俺のことを指しているだろう。ちゃんと修正させよう。

「いえ、俺は村上航です。東ではないです。」

「ええ、東航君。ようこそ文月学園へ。」

こいつ話聞いてねえぞ！鉄人みたいにスルーしましたね！？

「あなたがこれから入るのは私のFクラスです。」

「ーことはあんたが担任か。冴えないオジサンはさりげない『ついてこい』というサインを出しながらFクラスの方角に歩いていった（そして現在）」

どうだ！脇役共め！こんな腐った教室で俺はみんなの冷たい視線を浴びていたがいいや。そして俺は冷たい視線をスルーして空いている席に座った。

「では廊下側の人から自己紹介をお願いします。」

教師の指名を受けた廊下側の生徒の一人が立ち上がり、自己紹介を始めた。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

と言った男の制服を着た女の子だ。いかにも女の子だ。まさか〇ケメンパラダイスみたいな事情があるかもしれないな。一応クラスが聞けなかったことを聞いてみよう。

「木下さーん！質問！」

「なんじゃ？」

「木下さんって女の子なんですかー？それとも女の子だった体を手術して男になったんですかー？」

「ワシは元から男じゃ……」

呆れた顔で手慣れた感じで質問処理する木下さん。なんか当たり前前の質問しちゃった？

「えー、次の人」

教師が呼び掛けると、一人の小柄なおとなしそうな男の子が立ち

「……………土屋康太」

そしてしばらく脇役共のくだらない自己紹介があり、クラスで一際美少女の娘が自己紹介だあああああ！！

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きが苦手です」

ポニーテール帰国子女きたあああああ！見よ！神はいるっ！！

「あ、でも英語は苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は吉井明久を殴る事です」

ガツカリしたよ。特定人物へのツンデレだなんて。殴られる人は幸せだよ。

「はろはろー」

笑顔で手を振っている先にはいかにも可哀想な少年がいた。

「あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

吉井か……。君は幸せ者だぜ……。

FFF団とか何とか色々自己紹介が終わり、吉井とか言うやつの出番が来た。

「——コホン。えっーと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んで下さいね♪」

ダイアリー

何なんだよ、このクラスのノリは。見てる方としては痛いぞ。

「失礼忘れて下さい。とにかくよろしくお願いします。」

さりげなく吉井の奴、自ら押して引いてやがる。おふざけの自業自得って奴か。でもクラスのノリもイマイチわからん

「あの、遅れて、すいま、せん……」

えっ？

[illegible]

！！

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします…

…」

「はいっ！質問です！」

「あ、は、はいっ！なんですか？」

姫路とかいう美少女は少し緊張しているようだ。

「なんでここにいますか？」

「なんでここにいます？てめえは人の出会いに理由がいるのか？それともなんだ？このジム以下のボールみたいに雑k…っわっと！すみません調子に乗り過ぎました。」

いきなりカッターが飛んで来たぞ、おい。どうなっているんだよこのクラス。明らかに大変なものが交じっているんだろ

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…」

みんな頷いている。姫路はこのクラスに適性じゃないのだろう。

クラスメイト（どうしようもない雑魚）の振り分け試験のくだらない言い訳はスルーしておき

「一年間よろしく願いますっ！」

そして吉井の隣に姫路は座った。うん。見るからに吉井君が主人公だね。だってライトノベル『バカとテストと召喚獣』っていうタイトルだからね。テストとバカはいたが、召喚獣がまだ見られてない。吉井達がトークをしている。くそ、姫路と島田でダブルハーレムとかやるなよ、このやろー。

教師が注意して教卓が壊れて席を外しているな。よし、後ろの人に姫路さんのことを聞いてみるか。なぜこのクラスに適性じゃないかをな。確か後ろの人は須川と言ったな。

「なあなあ、須川君。聞きたいことがあるんだけどさ。」

「おお！君もFFF団に入ってくれるのか！」

「んじゃ入るけどさ」

「ありがとう！心の友よ！」

「それは置いておいてなぜ姫路がこのクラスに適性じゃないか聞き

たい」

「転校生はわからないか。ああ、成る程。姫路瑞希。バストは…」

「いや、そこはいい。学力的な問題についてだ。」

「すまなかつた。心の友よ。実は奴は本来なら頭がいいクラスに入る予定だつたんだが…」

「高熱を出して途中退席したと」

「そんなところだ」

「ああ、ありがとう須川。」

「同じ仲間には当然のことをしただけだ。」

「ありがとう、須川君。君はいい“主人公のエロい友達”（『日常パートで少ししか出れない余計な脇役』になれるよっ！

先生が帰ってきたな

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ。」

「了解」

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

教師の質問に頷く坂本。

そして自信満々で教壇に上がりこう言った。

「Fクラスの代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。さて、皆に一つ聞きたい。Aクラスは冷房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが——、不満はないか？」

『『『『『大ありじああっ！』『』『』『』』』』』』

坂本が言うからにはAクラスのリクライニングシートやらなんやらをこのぼろっついFクラスに付けることができるらしい。そんなことが可能なのだろうか？いや、ライトノベルだから可能なだろう。「これは代表としての提案だが——FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う」

試験召喚戦争……。この文月学園の最大の行事……。成績に比例した召喚獣を出し合いお互いに戦う、いわば戦争だ。（↑頭にインプットされてる）勝てば天国（設備が良くなる）、負ければ地獄

（設備が悪くなる）。今、恐ろしい賭けが今始まろうとしていた。

一 限目 第二問 僕と転校生とFクラス（後書き）

修正完了

## 一限目 第二問 俺と宣戦布告と死にたがり

試験召喚戦争とは…。文月学園には上限なしのテストがある。そのテストの点数によって強さが変わる召喚獣を出し合って戦うらしい。そして各クラスの代表（將軍）の召喚獣がやられたら勝負はつく。「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」クラスからは疑問の声が飛んでくる。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝てる要素が揃っている。それを今から説明してやる。おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

あいつ、いつの間にチラ見を！？

「土屋康太。こいつが有名な、ムツツリー二だ。」

「……………！！（ブンブン）」

ムツツリ変態とムツツリー二を混ぜたようなあだ名だな…。

クラスの屑どもからは意外の声が発せられる。

「姫路のことは説明する必要はないだろう」

そりゃそうだ。天才がこのクラスにいるのだから。

「木下秀吉だっている」

あの女の子がなぜ？

「演劇部のホープだからな」

成る程。確かに色んなこと（色仕掛け）に使われるのか

「それに、吉井明久だっている」

クラスの空気は静かになった

「ちよつと雄二！なんで僕の名前を呼ぶのさ！」

吉井がバカなのは見てわかる。だからといってその吉井が頭が良くなったら士気が上がるということなのだろうか、坂本がいうには？「知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは観察処分者だ。」

クラスが呆れた雰囲気になる。クラスの一人が言うからにはバカの代名詞らしい。

「あの、それってどういうものなんですか？」

「具体的には教師の雑用だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

成る程。ということは普通の召喚獣はものとかに触れないが吉井のはものを活用できるってところか。実に主人公らしくて悔しいよ。

『おいおい観察処分者ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』

まあ主人公にはリスクがつきものだからな。って俺が主人公じゃなくってどうするっ！？

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！』

「ならばペンを取れ！出陣の準備だ！」

『おおっー！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

凄い勢いだなこのクラス。この勢いなら勝てるんじゃないの！

そしてこの後吉井明久が犠牲になったことは俺以外誰もが知っていた。

### 一限目 第三問「鬼と悪夢の召喚獣」

【試召戦争が終わったあととあるDクラスの生徒が書いた日記の一部】

俺達のクラスの中に一人の生徒が入ってきた。補給を終えた生徒かと思ったら黒髪の寝癖が凄い生徒がだった。奴は俺達の仲間ではない。Fクラスの生徒だ。奴に五人くらいの生徒が挑んだが一瞬で倒されてしまった。奴の表情はこちらを見下すように笑っていた。奴の召喚獣の姿はまさに武蔵を連想させられる二本の刀を持った化け物だ。俺は今、悪魔を見た。

#### 【東視点】

試召戦争が始まったらしいな。凄い勢いで生徒達は廊下を走りだした。

しかし肝心の主人公の俺はFクラスの教室の前の廊下にいる。

坂本いわく転校生は足手まといになるからここにいろとのことだ。たく、どこの連邦軍の士官だよ。坂本き全く相手にされてないじゃないか。俺ってテストの点はまあまあ自信があるんだぜ。いつも平均より少し上なんだがな。

向こう側で大勢の生徒達の姿が確認できる。なんだか面白そうだな。ゲームみたいで。

行きたいな。待っているとなんだかイライラする。凄く退屈だ。もう我慢できない。主人公っていうのは特攻隊に所属してるもんじゃないのか！主人公の俺がこんな脇役な訳がない！！

「俺は主人公だ！！先行部隊の援護に回る！」

「待ってよ！東君！まだ指示があるまで待機……」

そんなクラスメイトの声を無視して俺は廊下を猛スピードで走った。

あちらに島田と吉井がいる。あいつらならなんか絡みやすそうだ。早速行ってみよう。

「吉井！島田！援護するぜ！」

「東君！来てくれたんだね！」

軍服を着た小さい島田と小さい一人のドリルのツインテールの女子生徒が戦っている。お互いその後ろでは島田、そして一人の女子生徒が立っている。恐らく小さい人みたいな奴が召喚獣のだろう。そしてその召喚獣の上に数字がある。これが点数に比例する強さなのだろう。そんなことより島田が苦しそうだ。ここがヒロインを助ける主人公の見せ場らしい。こないだ須川に教わった言葉…サモンか…。よし例の決め台詞で

「主人公の時間だ！<sup>ヒーロータイム</sup>試験召喚っ！！」

俺がサモンと叫んだ途端、召喚獣が魔方阵から出てきた。そいつは俺がいつも気にしてる黒いボサボサの髪、白いコート、黒い長袖のジーンズ、腕にはガンプレート、ちゃんと手袋装備。そして額には作業用ゴーグル、腰には二本の刀を装備した小さい俺（召喚獣）が今姿を現われた。

『化学 Fクラス 島田美波 41 & amp; Fクラス 東航

208 vs Eクラス 清水美春 78』

「うちのクラスに200超えがもう一人いたのねっ！」

島田は驚きを隠せない様子だ。一方、女子生徒は

「美春とお姉様の邪魔をする豚野郎は必ず殺します…必ず殺します

！！」

女子生徒の召喚獣がこちらに来たヤバイ！召喚獣に指示を！

ジャンプして女子生徒の召喚獣はこちらに剣で振りかぶって攻撃しようとしている。ヤバイ。しかしこの動作はどつかのアニメで見たことある。ガンダムのザクの二体目を倒した時の状況だ。その状況をイメージしながら俺は頭の中で指示した。『刺せ』っ！！

「嘘です！Fクラスに二百点超えなんて！！」

俺の召喚獣が両手で持った一本の刀がいつの間にか空中で女子生徒の召喚獣の胸を刺していたようだ。倒した…。

「ありがとう！確か…えっと…」

「東航だ」

「思い出したわ！助かったわ！東！」

「当然のことをしたまでだが」

女子にありがとうと言われるとなんだか照れるな。これも主人公の宿命だからしょうがない。

「補習の鉄じ——西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします—」

と島田が言ったら壁からターミネーターみたいな教師がすり抜けてきた。

「おお。清水か。たつぷり勉強漬けにしてやるぞ。こっちにこい。」

俺に倒された女子生徒は捨て台詞を吐きながらターミネーターに連行されていった。

「吉井」

「島田さんお疲れ。とりあえず一回戻って化学の…」

「吉井」

「えっと…ひがし君…」

「吉井、航でいいぜ」

吉井が呼びにくそうに『ひがし』と読んでいたのでこう声を掛けておいた。

「じゃあ航！行こ…」

「よくもウチを見捨てたわね？」

「記憶にございません」

殺意溢れる島田によって吉井が危険な状況にさらされている。助け船を出そう。

「とりあえず島田、時間はねえから早く受けてこいよ。こんなところでもたましてたらまた戦死しかけるぞ」

こんなところで奇襲されたらひとたまりもない。早く島田を行かせ

ないと

「確かにそうね。吉井、後で覚えてなさいよ」

「……………」

島田が補給室に行ってくれた。良かった良かった。なんか怖かった…

「よし、とにかく秀吉たちが補給している間、前線を維持するんだ！一歩も進ませないように！」

Dクラスの奴等が十人程来た。さあ勝負だ！

「……………」試験召喚っ！「……………」

『化学 F 東航 208 VS Dクラス生徒十人 平均83』

二本の刀を持ちし召喚獣は一瞬にして十体の召喚獣を斬った。

「こんなにも補習を受けたい生徒がいるとは非常にいい意欲だ！」

「誰か助けて！！」「いやだ！補習は！」

ターミネーターが壁からすり抜けてきて十人の生徒を一回で連行した。

「航君…すごいよ！」

「当然だ、明久。」

つい名前ですってしまった。まあ明久の方が呼びやすいしな。

「おい！雑魚ども！ラインを上げるぞ！」

『…………』誰が雑魚だっ！！『…………』

Fクラスの男子達が一斉に俺に突っ込んだ。

「防衛部隊が突破されたぞ！」「何！バカな！！」「あのFクラスにこんな奴がいるなんて！」

たく…雑魚共は早く戦死してろって言うんだよ。

「教室に奴があああああ！！」

平均より少し高い200点のまさに無双になっている。ガンダムで例えると俺はゲルググ並なのにてめえらは本来ジム並だと思っていた。しかし実際は装甲がかなり薄いボールだった。

「もう突破された？」

驚くしかない敵の將軍。そして將軍が俺の前に。さて、近くの雑魚も消したし討ちますか。

「玉野美紀、試験召喚っ！」

「こっちは任せて！航！それより君は！」

「ありがとうな、明久。」

あちらは明久に任せておこう。それより中ボスを倒すことが先決だ。

「そうか、てめえが平賀か？」

「ああ、そうだ！行くぞ！『試験召喚っ！』」

「『試験召喚っ！』」

『化学 F 東航 196 VS D 平賀源二 117』

さっき倒した十数の雑魚で操作は慣れた。若干指示と行動の時間差が生じる。だからこそ相手が一番最初にやりそうなことを先読みすること。いわばじゃんけんみたいなもんだ。それが試験召喚戦争においての一番のテクニクだ。

もちろん相手は攻撃を最初にしてくるが

「抜刀カウンター」

「カウンターだっ！？」

相手の攻撃を回避。そのまま相手の召喚獣の首を素早い抜刀技で斬った。

「まさかつ！此れ程の腕の奴がつ！」

そして將軍を倒した。

この戦争は俺達の勝利で幕を閉じた。

《二限目に続く》

一限目 第三問「鬼と悪夢の召喚獣」(後書き)

！ ！  
いつの間にか修正しました。しかし手抜きクオリティは変わらない

二限目 第二問 「手料理と明久と俺の死亡フラグ」(前書き)

死にたくはない。だがこれはやらなくてはならないことだ。女の子の料理を食べ残すのは男の恥だ。でも…by 明久

## 二限目 第一問 「手料理と明久と俺の死亡フラグ」

坂本と平賀とか言うDクラスの代表様様が話し合って設備は交換しないけど代わりに何かを何とか何とか。とりあえず戦後対談が終わったみたいだな。

「まさか、転校生がこんな戦力になるなんて思ってもいなかったな。次のBクラス戦の作戦を少し立て直す必要があるな」

「お手柄だね、航。」

「あの時はありがとう、東。」

「だから言っただろう、まあ主人公として当然のことしただ…」

坂本達にせっかく誉められていたところを包丁が俺の首筋の少し横に飛んで来た。

「おい、ちよつと待て。誰だよ包丁飛ばした奴は！午前中カッター飛ばして来た奴と同一犯だろ！」

この場にいるとなんだか殺人事件の被害者になる気がする。そろそろ下校時刻だし帰ろうか。

「じゃあな、明久」

「じゃあね、航」

バックの中に入っている地図のマーキングによるとここか。着いた。ここが今から俺が住むマンションか。早速入るか。

少し広いリビング、キッチン、バスルーム。一人暮らしには持つてこいだ。

リビングにはPCや机がある。

机の上に何かある。読めますか？▼



突っ込み所が大量にあるんですけど！何、エウデル共和国って！  
 ？しかも両親桃太郎のじいさんばあさんかよっ！しかも男の娘って  
 ！！！！

苛立ちしか湧いてこない主人公設定だった。まだ何か書いてある。

大好きなもの ひまわりの種  
所属軍 ハムチャンズ▼

とつとつ〇ム太郎じゃねえか！！

[illegible]

けへつ ▼

てめえええええ！今すぐ東京テレビに謝ってこいよっ！

押さえきれない苛立ちはもうリミッターを越える寸前だ。まだ続きがあるな。これ以上ふざけると破って捨ててやるからな！絶対捨ててやるからな！

あとは○i k iで色々調べてね あは♪ ▼

「てめえええええ！！！！」（ビリビリバリツザクザクポイツ）  
もういいや。今日は色々なことがあった。

転生、仲間、試験召喚戦争…。優等生が楽しむ勉強ゲームか…。理不尽だな

「ただどな、成績がいいだけで勝敗は決まらない」

成績の力で圧倒してた俺が言えないんだが、そんなことを言いながらも今日自分で作った（一応家事もできるんだぜ）しょうが焼きを食べ、風呂に入り、寝た。

昨日はそんなに戦ってなかったからテストを受ける必要性はほとんどなかった。そんな俺は昨日暴れるはずだった姫路さんと二人で他

の人がくるまで待機（自習）していた。

「き、昨日は凄かったですね。私の分までありがとうございます。それに比べて私は…」

姫路の表情が少し暗くなったな。そりゃクラスに貢献する前に俺が出番を奪っちゃったから暗くなるのも当然か。フォー入れっか。  
「気にすることはないさ。それに今回は補給テストも終えた状態で来たんだろ。前は偶然活躍できなかっただけさ。それに坂本に聞いた話だと俺レベルがうじゃうじゃいるから姫路の凄い強さでクラスに貢献すりゃいいさ。」

「ありがとうございます」

「悩んでる女の子がいりや、紳士（主人公）として当然のことをしただけだよ。」

ふう。戦争前にうちのエース様のモチベーション下げちゃったらどうしようと思っただぜ

「あ…、はい。そうですね」

「そんなことよりさ…、姫路って好きな人いんの？」

「え、ええ！！」

姫路が困惑し始めた。こんなイチコロできる台詞を吐いたんだから落とせないことはない。きっと好きな人がいるんだっ！

「そ、それは…その…」

「言いたくなければ言っな。別に俺は強制はしてないんだし」

「いいんですよ！それは…」

「すまん、俺が悪かった。だから落ち着け。そっぴやもうすぐ明久達が終わりそうだし行こうぜ」

「は、はい…／＼／」

姫路が頬を赤く染めながら言ってきたので逃げ道を作っておいた。

「東君、もし良かったらお弁当一緒にしませんか？私が作ったお弁当の味を試してもらいたいので」

「ああ、喜んで」

明久達があっちにいる。

「あ、あの。皆さん……」

「うん？あ、姫路さん。それに航。どうしたの？二人とも学食？」

「明久、姫路が弁当の味を味見して欲しいらしいぞ」

「昨日の約束の弁当かう？」

「は、はいっ。皆さんももし迷惑じゃなければ……」

「迷惑なもんか！ね、雄二」

「ああ、そうだな。」

「そうですか？良かったあ」

姫路がとても嬉しそうだ。そういや俺は弁当作って来てないし、売店でおにぎりでも買ってくるか。

「じゃ明久達、先行っててくれ。俺は売店で握り飯でも買ってくるからな」

「また後で！」

「俺も飲み物買わなくてはな。一緒に行こうぜ東」

「ああ、そうだな。坂本」

「待って！ウチも！」

俺は坂本と島田と共に売店に行った。

ふう、おかにかにするかしやけにするか悩んだぜ。島田と坂本は先に行ったし姫路の弁当はもう食べられているかな。まあいいや。屋上の扉を開けたらそこには

・倒れたたま動かない土屋

・白雪姫のように眠る木下

・プルプルと震えながら倒れている坂本

・怯えている明久

何が起きたんだ……ここで……

デザートフルーツミックスヨーグルトが置いてある。容器からして姫路さんのだ。

「明久、これ食べていいのか？」

「うん。姫路さんが食べていいって。」

明久は肩の荷が降りたような表情になっている。まあいいや。いただきます。もぐりとさっきもらったカレー用の使い捨てスプーンで一口。うんこれは…

薬品だ

そうして俺の前が暗くなった…

## 二限目 第一問 「手料理と明久と俺の死亡フラグ」（後書き）

神「緊急ニュースじゃー!!」

明久「もしかしてこの作品終わっちゃうとかっ!？」

航「ないない。どうせ糞じじいが出番なくてデマ流していんだろ？」

神「ちがうわい。」

航「じゃあ何だよ。デマを流すと返って出番が無くなるぞ」

神「このたび！コラボをするかもしれないんじゃー!!」

航「かもしれない？するかしないかはつきりしろよ。こんなくそ人氣低い作品がコラボするわけねえだろうが。それにまだ俺は強くなる予定だし」

明久「確かに腕輪がないと話にもならないしね」

航「成績が戦力の決定な差ではないぜ、明久。じゃあコラボするまで300超えすればいいんだな」

明久「それはさっき言ったことと矛盾しているような気がするよ…」

神「とにかくお知らせを待つんじゃない」

明久と航「お前が仕切るな!!」

## 二限目 第二問 戦争前と異端審問会と二度目の死亡フラグ

「前以上に時間がかかったな。」

俺はあの後保険室にお世話になった。正直あれ（姫路の弁当）は毒に等しいよな！。

「お世辞は辞めろよ、須川。第一時間がかかったのは姫路の弁当で

――  
「姫路の弁当だと…食べたのか!？」

「そ、そうだが…」

俺の声を遮るほどの大きな声を出した驚きを隠せない須川君、なんか顔が怖いぜ。そしてクラス全体がじっとこちらを見てきているちよつと待て。みんないつ黒装束になって武器を持っているんだよ!？しかも須川まで?!？怖いよ、その不吉な姿つ!!

『異端者には罰を!』

『裏切り者にも罰を!』

『『異端者には罰を!! 異端者には罰を!!』』』

『総員狙えつ!!』

『『『おおおおおおおお!!』』』

てめえら何者だよ!!？

俺は一目散に逃げた。それを猛スピードで追いかけてくる黒ずくめの集団。おそらくあの包丁やらカッターナイフを投げてきたのも奴等だろう。あれ、携帯にメールが。

「16:26 東航 異端審問会に殺され DEAD END」

なんで未来日記みたいになってるんだ!

なんとか逃げ切ったぜ…。ここは…これから戦うべき相手、Bクラスの教室前だ。戦争前に一発やりに来たなんて誤解しかねないな。そのまま帰りたいけど鞆教室に置いてきちまったしな。。渡り廊下から教室に行くと異端審問会に殺されるしな。そうだ。屋上に行

こう。そうすりやなんとか新校舎と旧校舎の間を飛び越えれば問題ない。オッケー。

階段を上がり屋上の扉を開けるとそこには――

そこには――  
銀髪のツインテール、低い身長、あどけない表情、今ここに――

「神の少女がいた……」

「だ、れ、が、少女って!?!」

つい口に出しちゃった。少女は怒りこちらを見ってくる。降ってくるのは暴力かと思ってたら少女はなにやらリモコン?みたいなものを取り出した。

「よくも私をバカにしたね……よくも……よくも……メッカンメッカンにしてやるわっ!」

メッカンメッカンってなにやらヤバいそうですね。とりあえず旧校舎に逃げましょう。俺はそーと忍び足で逃げようとしたら少女がリモコン?のボタンを押した。するとあらまあ屋上への扉から警備ロボットが大量に出るではありませんか

「いきなさい!グレート!」

少女の掛け声に合わせて警備ロボットが網を持ちながらこちらに走ってくる。俺はすぐに旧校舎の屋上に走幅跳びで渡り、そのまま教室に逃げた。

「ぜえはあ……ぜえはあ……」

警備ロボットに見つからずにここまで来れた俺は今まさに覚醒なうだ。体力の限界だ。俺は残りの力を振り絞り、ドアを開けた。

「へっ!?!」

そこには明久と姫路が顔を赤らめていた。姫路の手元にはピンクの愛の招待状ラフレターがある。気まずいな。なんだか。よし、こうなったら秘密の回避法をやってやろうか!

「まあ頑張れよ、二人とも」

そして俺は鞆をテイクアウトして逃げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1726ba/>

---

バカとテストと中二病っ！

2012年1月13日21時56分発行